

●捻挫、打撲から骨折、脱臼まで骨、関節に多発する外傷——

相撲

井口 傑 (慶應義塾大学整形外科・国技館相撲診療所)

相撲は古くから国技として、多くの人に親しまれてきた(図1)。下は子供の遊びから、学校のクラブ活動、社会人のスポーツ、上はプロとしての大相撲まで幅も広い。比較的安全なスポーツではあるが、格闘技である以上、外傷、障害の発生は避け得ない。それらの究極例として、大相撲の力士の外傷、障害について述べる。

I. 相撲による外傷、障害の特徴

相撲は、体の一部でも土俵の外に出たり、足の裏以外が少しでも土につくと負けという厳しいルールの格闘技である。また、体重制もなく、190cm、200kgを越える巨漢同士が激しくぶつかり合い、短時間に勝負が決まる荒っぽい競技である。その上、無理な肢位から転倒し、上からのし

かかれるので、打撲、捻挫から骨折、脱臼まで骨、関節の外傷が多い。(図2)

相撲は足、腰と言うぐらい、投げ、掛けなど多くの技が腰や下肢に負担をかけるので、膝、足関節の靭帯損傷が多い。相撲の基本と言われるすり足も、下手をすれば趾、足関節を傷つける(図3)。突き、押し、張りでは指、手、肘、肩関節の損傷も少なくない(図4)。腕をきめ(極)られたり、ため(撓)られれば無理がいく。それだけでなく重い相手を引きつけ、釣り上げ、捻ろうとすれば上肢の関節への負荷は大きい。頭からの当り方が悪いと「電気が走る」と言い、頸の損傷もある(図5)。いちどきに怪我をしなくても、ぶちかまして食いさがれば頸椎に小さな損傷が繰り返され、寄り、釣り、捻りなどの技は

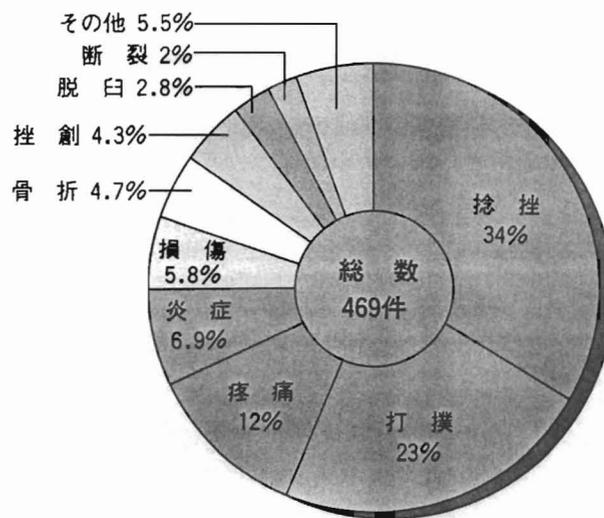
腰椎に負担をかけ、変形性脊椎症を起こす。勝負に有利な重い体重も、腰椎ばかりでなく、膝、足関節に負担をかけ、変形性関節症の原因になる(図6、7)。

II. 治療の特徴

相撲教習所では、基本体力以外にも、しこ踏み、股割り、腰下ろし、伸脚など下肢の柔軟性と強化のための訓練をする。技だけでなく、柔道の受身に対応する投げられ方も身につける。しかし、相撲の激しさ、力士の体重を考えると有用でも十分とは言えない。骨、軟骨、靭帯の強度は、筋力と異なり練習で強化し得ないので、体重比では他のスポーツ選手に比べて弱い。一度、外傷を受け関節の不安定性が生じると、体重と



図1



(昭和61年9月～62年5月国技館相撲診療所)

図2 外傷の種類(慶大整形スポーツ外来、若野紘一講師による)

激しい稽古により外傷を繰り返し、変形性関節症に陥る。一般には安静、減量が治療の原則であるが、力士には不可能に近い。安静を局所に止め基礎体力を維持させ、次いでテーピング等で保護しながら関節周囲の筋力を強化し、現役の間だけでも筋力で関節の安定を得るようにする。しかし、厳しい大相撲の社会で個別のトレーニングをすることは難しく、6場所制という時間的制約、巡業という物理的制約もある。また、関節や背骨の手術をして現役が務まった例がないという意見もある。これらの多くの制約のなかで、競技寿命の短いプロの格闘技の選手である力士を治療していくには、相撲とその社会をよく理解した医師と指導者の協力、設備、そして力士自身の意志と理解が大切である。



図3 第V趾の骨折



図4 第IV中手骨骨折

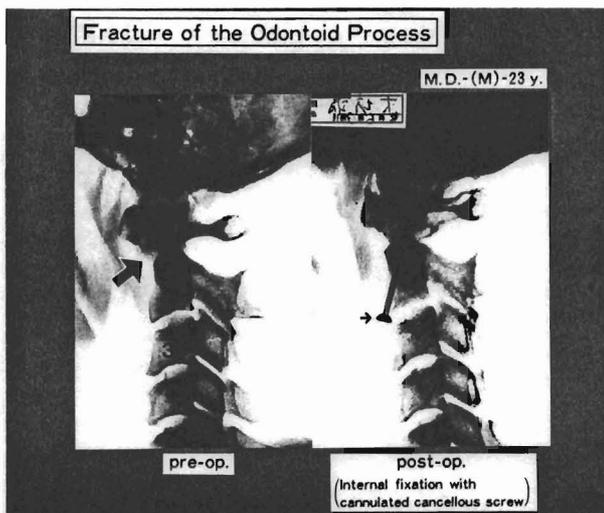


図5 齒状突起骨折(左：術前、右：術後)



図6 膝変形性関節症

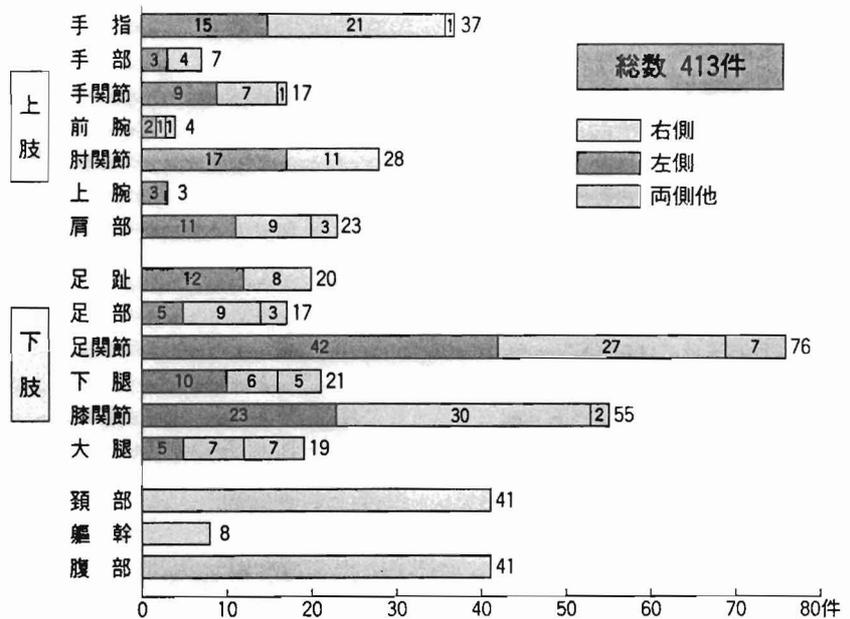


図7 外傷の部位(慶大整形スポーツ外来、若野紘一講師による)

(昭和61年9月～62年5月、東京場所)